

令和4年度（第1回） 身近な教育委員会 実施概要

区民が身近に感じる教育委員会の実現に向けて、「身近な教育委員会」を下記のとおり実施しました。

記

日時 令和4年5月20日（金） 18時30分～20時00分

場所 教育支援センター研修室

概要

第一部 第10回教育委員会

報告事項「いたばし学び支援プラン2025と4つの柱について」

第二部 保護者懇談会

○グループ討議

『いたばし学び支援プラン2025の4つの柱について』

4つの柱について、グループごとに討議を行いました。

内容要旨は次ページ以降のとおりです。

参加者 68名

内訳 保護者等 49名

教育長・教育委員 4名

中川修一教育長 高野佐紀子教育長職務代理者

青木義男委員 野田義博委員

教育委員会事務局関係者 15名



グループ討議

各班の発表内容（要旨） ※時間に限りがあるため、4つの班に発表していただきました。

<B 班> 誰一人取り残さないための居場所づくり

- 中高生勉強会、フレンドセンター、中央図書館、生涯学習センターそれぞれの取組について今日説明を受けて初めて知ったという意見が多かった。
- 自発的に行く子がいるのか、親から言われて行くのかというのを確認したところ、親から言われて参加して、継続して続けている子が多いとのこと。
- 学校を通じて年1回のお手紙で周知している。中学生の子どもがいるが、お手紙を手元で見たことがない。例えばお知らせ配信システムで保護者の方に直接連絡が行くように周知していただくなど、もう少し周知の方法を広げていただけたら知り得ることもできるのではないかな。
- 例えば中学生から大人まで、縦の年齢幅がある学びの場所、あとは当事者である子どもたちの生の声とか、実際に体験した子どもたちに良さを聞いて、改善することとかも聞いて、よりよいものを作っていけるような居場所づくりというのが大切だ。
- 学び i プレイスを卒業した子が、今度はボランティアとして関わっているということも実際にある。雰囲気がとてもいいという話も参加者からは出ている。学びの循環というのが、拡張していけたら良い。

<G 班> 保幼小接続・小中一貫教育

- 未就学児から中学生まで、各世代の状況を踏まえながら、どういうところが課題なのか話をした。
- 学びのエリアという枠で色々と考えていくというのはベースにあるが、一方で、学区割と学びのエリアが必ずしも一致していない部分がある。そこが課題ではないかな。
- （中1のお子さんがある保護者の方から）中一ギャップは出身小学校の人数に偏りが出てしまうことも要因ではないかな。小学生の頃から、中学に上がるに向けての交流があれば、子どもたちの精神面でのサポートになるのではないかな。
- 児童・生徒の交流を学びのエリアでと書いてあるがコロナでそれが実現していない部分もある。しかし、オンラインとか色々な手法でできるものがあるはず。
- 小中の連携が討議テーマだが、一方で、都立学校や中高の連携というものもある。都、区、その辺りもさらに連携できると良い。

<H 班> 板橋区コミュニティスクール（iCS）の推進

- 地域と子どもたち、地域と学校との i C S のバランスの関わりかた、i C S という組織の活動はどうすれば分かりやすくなるのかということについて熟議した。
- 参加者全員、i C S というものの自体がよく分からないという話になった。
- どのような方が、どのように活動して、保護者とどうつながっているのか、学校とどう連携しているのかというのが見えない状況。
- i C S の構成委員の方々が、地域で活躍している方が多いので、どうしても地域のイベントで、i C S なのか、町会なのかというところが分からないことがある。

- i C S の活動について、例えば学校ホームページで「i C S の方からこのようなご支援をいただきました」とか、「こういう方針と一緒に子どもたちのために考えています」といったアピールがあれば伝わりやすいかもしれない。

<I 班> 学校における働き方改革

- 学校における働き方改革をテーマに、皆さんの考えていることを出し合って、討議までいかなかった。
- 朝の 4 時半から深夜 1 時まで働いている小学校の先生がいるらしく、寝る時間が 3 時間ぐらいしかない。毎日これでは、死んでもおかしくないなと思った。
- なぜこんなに先生が忙しいのかというのを、我々保護者は全然知らない。何を学校でやっているのかも分からない。ただ、毎日、忙しそうにしているのは分かるけど、何が忙しいのか分からない。これがもう少し可視化できれば、例えば保護者が手伝える部分、もしくは地域でお手伝いできる部分があるかもしれない。
- 先生たちはこんなに大変な仕事をしている割にはやりがいを持ってやっていらっしゃる。先生、学校、我々保護者も、マインドチェンジしていく必要があるのではないかなと思った。
- とにかく働き方そのものを見直さないと、本当に先生たちが死んじゃうなというのが率直な感想。

各班で出たご意見（抜粋）

<A 班>保幼小接続・小中一貫教育

- 一貫教育がはじまった実感がない、内容が漠然としていてわかりにくいので、保護者に一貫教育の内容・取組などについて具体的に伝えていく必要がある。
- 保幼小接続は難しいと感じる。特に保育園は管轄も違うこともあり、また幼稚園は私立も多く、遠方から通っている子も多いため近隣小学校とつながるには工夫と努力が必要。
- 小学校入学を迎えるにあたり、幼稚園や保育園児への支援や取組があったら知りたい。
- 小中一貫教育を進めるためには板橋色や明確な目的があった方がわかりやすく、また伝わりやすい。
- 推進のためには品川区など先行自治体をまねる、ハード面での整備を進めることや制服などを統一かまたは逆に廃止するなどのわかりやすい取り組みも必要ではないか。
- 園児の散歩などでの校庭及び遊具の開放など学校をオープンにしていく取組もよい。

<C 班>学校における働き方改革

- 教員がどうして疲弊しているのか今一つ具体的にわからない。仕事の見える化が必要である。
- 毎年同じことを教えているのであれば、ビデオ講義の割合を高め、全体の 1/4 から 1/3 までビデオ講義化してはどうか。
- 事務処理や専門教科について、もっと専任の職員や外部講師が必要だ。
- 支援が必要な児童生徒を見守る保護者ボランティアのようなものも良い。また、学校を支援する人材を配置するにあたっては、完全無償ではなく有償で配置すべきである。
- 部活動改革は必要である。部活動の合同実施や、生徒引率が可能な指導員の配置が有効である。部活動の担当を希望しない教員は、無理やり部活動の担当にすべきではない。
- 勤怠管理にタイムカードを導入したのであれば、故意に過少申告するようなことをさせずに、実態把握のために、適切に運用されなければならない。

<D 班>板橋区コミュニティスクール（iCS）の推進

- iCS の意義・成果を共有することが大切。社会も大きく変化していくなかで、子どもたちのこれからの時代を生き抜く力を培っていくために、学校と地域が連携し、ともに支援していくことで、子どもたちがより広い学びを得ることができる。
- 連携を高めていくためには、iCS の理解を保護者全体に広めていくことが重要。その際、現に PTA 活動として学校への支援が行われているなかで、iCS との関係・違いを分かってもらえるようにするとよい。
- 小学校と中学校では保護者との距離感が違うので、中学校への支援のあり方は一つの課題である。今後の中学校のあり方を学校と保護者等で考えていく。10 年・20 年先を見据え変えていこうと、一緒になって考えられる体制づくりに取り組んでいる。そのようななか、子どもたちの目標を考えよう、という視点から、子どもたちが思う課題に着目しようということで、iCS の会議に子どもたちも参加してもらい、子どもたちの本音を聞くことができた。こうした深まりもあるところ。
- iCS の活動は進められているが、「iCS ってなんだろう」、そのように感じる方々も多いのではないだろうか。学校地域支援本部や寺子屋事業などとの違いが分かりにくい、ということにも関連す

る。

- 学校地域支援本部の活動が盛んで、そこにコミュニティスクール委員会が加わったというようなケースでは、外からは学校地域支援本部により十分に支援が行われていると捉えられるため、コミュニティスクール委員会が加わったことの効果が見えにくい。

<E 班>板橋区コミュニティスクール（iCS）の推進

- 地域と学校が協働し、子どもを共に見守り育てる iCS の仕組みは大変大事である。
- iCS の実施状況は学校によって温度差がある。
- 両輪の 1 つである学校支援地域本部の活動の歴史がある学校は、CS 委員会と両輪・協働の関係ができておりうまく回っている。
- 教育のプロは教員なので、委員は「大人」として関わっていききたい。
- 委員のメンバーの持続可能性が課題である。
- 地域コミュニティとしての核としての学校として、学校と地域が win - win の関係を構築したい。
- 子どもたちからのフィードバックが嬉しく、地域の方々のやりがいとなっている。
- PTA と iCS の関係性を整理したい。

<F 班>誰一人取り残さないための居場所づくり

- 生涯学習センター、図書館、i-youth、科学館、郷土資料館などは居場所という視点でどんな役割があるのか知らない。
- 仲間づくりやコミュニケーションは必要なことである。
- 子どもと大人が断絶した状態にあると孤独感や疎外感が生まれ、良くないことが起こりやすい状況につながる懸念がある。
- 学校でなくとも、PTA 室であっても、自宅学習であっても学びを止めない方策は必要。
- 居場所づくりも必要なかもしれないが、そうなる前の早期発見の手法も構築すべき。
- 学校には行けないが、家では元気な子もいる。学校や社会とつながりを感じられることが大事。

教育長所感（要旨）

長い時間、ありがとうございました。

まず、本日お集まりいただいた皆様には、日頃から学校教育にご理解、ご支援、ご協力をいただいていることに感謝申し上げます。本日ご報告した内容についてはかなり伝わっているはずだと思っていたのですが、残念ながら十分伝わっていないということを知り、私は非常に反省しております。

私はAグループの討議に参加しましたが、「それはどういうふうに変化したの」「何をめざしているの」といった質問を頂いたときに、もっともっと丁寧なプロモーション、あるいはアピールをしていかなければいけないと痛感しました。

日頃から、「区民の方々に伝えているけど伝わっていないという状況だけは避けたい」と、教育委員会、また事務局内部でも話していますが、今日おいでになっている皆様の中にも、施策自体をよくご存知ないという方がいらっしゃる、ということは、出席いただいていない保護者の皆様にはさらに伝わっていない。私は強い危機感を持つと同時に、ご意見いただいたように、周知の方法も、紙ベースではなく、まさに、タブレットやSNS等も使った周知の仕方をしなくてはいけないということを、今、強く感じているところでございます。

一方、この4つの施策につきましても、非常に的確なご助言も頂きました。ご発表にもありましたとおり、「本当に、先生たちが死んじゃうよ」という、危機感を私たちも感じています。

そういう中で、青木委員がおっしゃっていたように、板橋の教育は、教育委員会や教育委員会事務局だけがやるのではなく、学校現場、そして保護者の皆様、そして地域の皆様と、連携し、協働して、結びついて、つなぐ、つなげる、つながる、そんなニュアンスで進めていく。そのためには、本当にお忙しいとは思いますが、こういう機会を設けさせていただいて、皆様方からのご意見、あるいはご要望等を、これからもお聞かせいただければと思っております。

今日のこの会は、本当に、私としては大変勉強になったとともに、改めて、背筋を伸ばして教育の板橋の実現に向けて取り組んでまいりたいと思います。

どうぞ、皆様方、これからもご理解、ご支援、ご協力のほどをよろしくお願いいたします。

本日は、誠にありがとうございました。